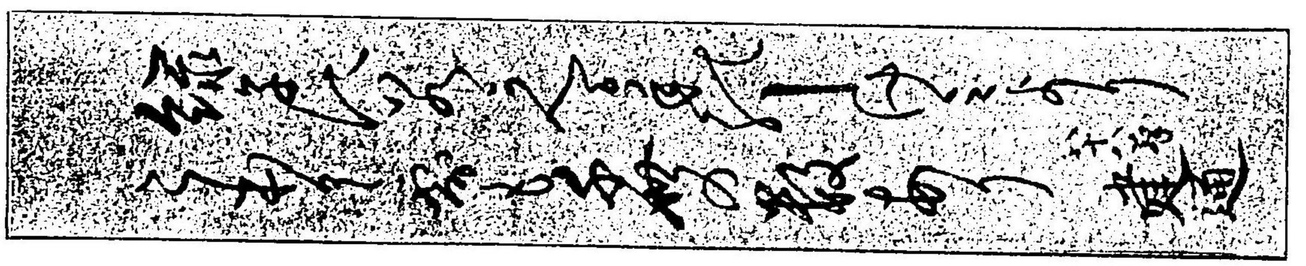
子猶集

伏見文秀女王殿下の御歌

久我老公の詠



特40
860

五福集齋

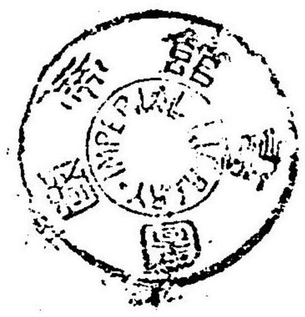
予嘗遊其校、在師範學校、屈指、殆三十年矣、朋友四散、有咄咄之感、而且不詳者、石井君鈞三郎同窓之親、而頃者移書於予東京寓居、曰、今茲八月廿九日者、友某等特開追吊之筵于大阪城南一心寺、請來會寫、又曰、野澗君龍潛適值華甲、顧同窓中先登者、願與諸友祝之、嗚呼、慶

吊異趣而其厚故舊則一也、予豈得不兩賛乎、已而歸鄉展墓、途過大阪、列法筵寫、事畢、宴于別房、會者若干人、悼亡喜存、諧故叙新、爾汝相呼、獻酬無序、宛然書生之舊態、而人生至樂存寫、此日野溯君亦自奈良至、噱然談笑、諧謔衝口而出、猶是當年柳仙子也、但須髮盡白、頹如渥丹、而懶班痣痕不復如往日耳、予擧杯為之

壽、后幷君出一冊子示予、曰、此野溯翁之壽辭集也、自王侯之製至同窓之作、俱載並輯在此中矣、獨無子什且集未有以名寫、子其撰之、予受而讀之、言有和漢、體有文詩、辭意雅馴、翁之風神躍然矣、予遂賦七律一篇以續貂、亦塞責寫耳、若夫題號之撰則予豈敢、固辭弗聽、乃咨諸友、曰、請名以五福、可乎、夫五福洪範九疇之

一、人惕于極則集寫、其目一曰壽、二曰富、三曰康寧、四曰攸好德、五曰考終命、今翁六十有一、甲子已周而復始則非壽乎、有數頃負郭之田且猶受廩祿則非富乎、身安心平則非康寧乎、學博道方、志在實踐則非攸好德乎、惟命乃不易言、然天道與善而翁能惕于極既得四者則其考終命也可知已、嚮所吊亡友不幸短折則

尚奚論、乃至如我輩或得其一二而五福并收翁之所獨也、而此集善形容之矣、名曰五福不亦可乎、皆曰善、於是乎序、明治卅五年八月廿五日南豐工藤一紀識于大阪蓁磴丘南臨水精舍、



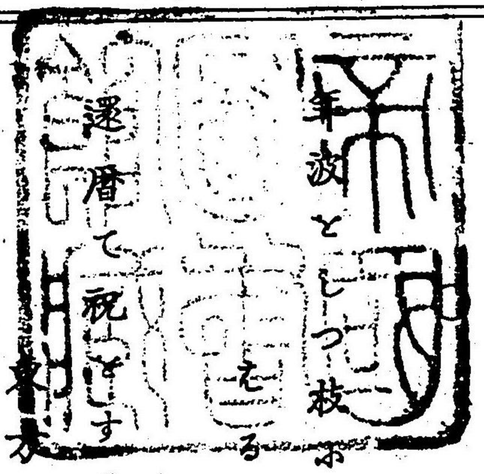
立福朱集
乙亥夏秋小軒

○

親友柳僊野淵翁學談和漢行有終始門下出濟々之士若干人蓋以翁之訓導有方也今茲明治三十四年壽周甲子上自　王族下至黎庶爭贈賀章者以百數焉於是門人高等女學校々長杉浦要太郎柳本尋常小學校々長松山義通堺市巨商池田喜七外數十人怕其散逸理而次之且醵資裝爲八曲屏將以永傳翁之家可謂斯師而有斯弟子矣使余記其由余之識翁八年於此矣文酒徵逐如漆膠然因

不可辭即爲之書但如翁平生襟度諸君之文備焉故不復贅也

辱交三環半逸東吉貞識於翠梧小築之南廂下



年波としつ枝かけて幾千世の
ゆたるも榮む和歌の浦まつ

正二位子爵　杉　孫七郎

還暦て祝ひとすはなほたやし
るは朔か見れは乳のみ兒

正三位男爵　北畠治房　七十歳

くそかへす暦の兄ひまたさらま
君かよはひの數とりにせよ

庭松の緑ふかめてあるしとも　　正四位男爵　水谷川忠起

千世ととともなふ色はみえけり　　近衛　秀山

霜雪に葉かへぬ松は幾千代も
さかゆる老の友とこそ見め　　近衛　尊覺

末遠き老のさか路ふくらふれは
むそ一年はふもとなりけり

六十とせの末は千とせのふちおれは　　正六位　西内成郷

たゝふる水の色もゝはらす　　正六位　臼井憲德

みとり子にゝへる達摩と手ゝうけて
君は八千代ゝ舞ととるおり　　從六位　福崎季連

春にあひてうれしき色の見ゆるゝお
うら若草の若のへる君

従六位　土方直行　七十一歳

ふるこよみうれる御代の暦もて
新に君の千世とかそへむ　土方茶坪

老かくす梅の花笠きてとれ
てふりわすれす百とせまても　従六位　淺井清長

更にまた開く暦のこへり花
さくらん末は千代の春まて

全

雲井阪いつか昇らん青淵に
龍ならぬに潜みはつへき　従七位　菱田孝雄

うらやすくよせし六十の年おれは
いくたひ君とたちかへるらむ　従八位　大東延慶

君か見る布美のこの方にまさのへす
こよみの數やおほ重ねけむ

巻暦まきかへしけるあしたより　　従八位　千馬祐順

つきぬさかえと君こそゐ見め　　従八位　榊原春彦

あしたつのたかきよえひよおらえおむ

六十と千代の始よはして　　従八位　高宮義房

山の端とのほる朝日の影とめて

きみゐ八千代の春と見るかな

君ならて誰か見るらむ色はえて　　権大講義　菱田孝嗣

千とせとまつの十返りの花　　泉一朴

杖つのす六十路の阪と越まして

なほ百歳の春よ逢へ君　　中村雅真

見ちとせのよえひとたもつ君おらむ

六十路は桃のえなの一ひら

くれなゐのきぬとり粧ふみとり子に
たちのへる君や千代の初春　田村宗彌秀

行年もなほ幾千代と祈るなり
二葉にかへる今とむしめに　富田昌言

千歳まで榮む松のみとり子の
生ひしむのしるしまつ遥る君かな　神原蓮阿

きく事のみゝふさのえて今年より
おゝろやすくも千世や經ぬらむ　上司延弦　七十二歳

ひとつよりまさよみそめて廻るわの
のきりおきよと君まおそ見め　水木要太郎

雪まふに竹おきのへりはるかへり
本卦のへりまわかかへる君　水木與清

わかゆへき君かよえひはまきかへす　杉浦要太郎

暦とともゝのきりなからむ　梅崎教亮 七十二歳

むそとせゝあまるひとつゝ萬代の
よえひかさぬるはしめおらまし　辰巳教明

千とせやまおゆへき君かよえひよゝ
むそち一つは麓なるけり

かさりおき君かよえひとうらやまむ　柳生等賢

みとり野淵ゝひそむ亀のも　樂師院保佑

道のため千代もいませと祈るかお
六十路はいまた老と思へす　大宮守慶

うみの子ふたちかへる年のまさひとつ
百の數まてかそふきみかお

みちとせも海山さとまおのらふる　佐保山晋圓

龍のよとひとゑむる君かな　遠山雅造

今年より二葉の松と植そめて

君の八千代の友かきまはせん　吉田幸二郎

野山ともかたらぬ淵の龍なれや

潛むも久し六十一つとは

うれしさい何ふたとへんいとけなき　松山義通

時よりうけし教へ子の身は　槙野歌子

かさりおく君まめてたしこの春い

辛の丑に惠頭の還りて　狛忠雄

いくちたひ月いちきらん三笠山

むそちひとつととりかすまして

ときはおる松のみどりよ千代あめて　小林秀續

彌さかへ行君かよはひは　寺田周三

六十とせと千たひのへせし君はけふ

その日とたひの春と經よける　青木正道

なよおともうちまのしたるけふの日よ

老の阪路とたとる幸のな

長かれと赤き頭巾と頂きて　淺田島須

鶴のよはひと祝ふ還暦　今井品三

野よ生ひて淵に年經し龍おれい

いつまてのくは世よ潛むへき　鹿田好文

野よ千年淵ゐ千年と潛むおる

たついおのの千年幾代經ぬらむ

六十ばまり一つみとりの春日野よ　宮崎豊廣

君い若菜と幾代つむらむ　芝葛敏

むそちまりひとついまたも六十とは

やたひのさねんはしめありけり

三笠山ゆもとよ生ふる若艸も　野村小軒

ゆさゝひ千代のなかめそふかな

老松もともよさのによあれ君　重年

たかきよはひと世ふあふくまて

人生出處所尤難
華甲高齡身益壯

次野淵君華甲自壽之韻

芳山月瀨自成天
麋鹿爲朋鶴爲伴
江湖官廨此心同
六十一年無限事

從四位　山高信離

君不隱山方隱官
鳳池風月費吟安

正五位　德富猪一郎

華甲方周神骨全
優遊詩酒樂遐年

正六位　青木成一

能醉煙霞能奉公
恢然總付酒杯中

笑他舊侶躍眈天
賴有重淵春水暖

正六位　東吉貞

天上奇榮豈得全
驪珠抱弄樂餘年

避世金門自在天
客來莫問勝簪否

仝

便言曼倩道情全
六十果然軒冕年

從六位　土屋弘

龍潛野淵君奉學職于堺縣及大阪府及奈
良縣殆三十年矣今茲辛丑爲其華甲余與

君同年生因錄新年作以賀君壽亦所以自賀也

鳳城佳氣曉葱瓏　已見雲霞分彩紅
生浴天恩亦何幸　今朝六十一春風

從六位上　土方直行

櫻菊壯丹三正宗　壽君華甲酒千鍾
須知漕肉能堪久　長使花顏妬醉容

正七位　相葉陽

甲子更開生面新　老而壯矣見斯人

馬鞍何用歛餘勇　齡達伏波猶一旬

生駒章

元是同鄉同甲人　海風山月舊相親
如今無恙南都客　白髮青衫華字春
余與君同年生于大阪後數十年始相識于
界浦又同客于南都而余今在西京故云

津田直信

鬱々歲寒空　昂然霜雪中
南都千古翠　卓立老愈雄

人生何半百　六十更延年　筒井寛聖
骨相離凡俗　胸懷自壽仙
剪燈閑閲史　温酒且尋賢
況又兒孫健　一門封瑞烟

村戸賢德

閒君還曆在今年　白髮紅顔此世仙
久立官途名姓顯　屢經考課賞譽傳

箪瓢寄樂非希聖　杖屨方勤豈隱賢
好是悠々開壽域　須踪曼倩比安全

上田慈啓

嬰鑠童顔恰若仙　悠然高枕樂安全
從遊弟子爭頌壽　無限春風滿盛筵

野村小軒

淑氣回来辛丑天　南都風物更安全
子孫親睦團欒樂　嘉迎壽康周甲年

好看官途做洞天
杖鄉何必做衰老

優遊月地又花天
若得遐齡似彭祖

世上榮枯總付天
壽如松柏非難得

後藤懋

欽君心跡得雙全
又到懸車尚十年

仝

詩味酒情身健全
白頭今日即青年

仝

醉中娛樂自倩全
已過人間華甲年

聞說野翁華甲年
可知三世陶潛子

知命者惟其樂天
高人自有無疆壽

長壽元來厚德祥
不須求藥探芝術

佐藤西郭

一朝景仰思如淵
老不龍鍾是健全

木村乾次郎

果然翁也形神全
換得春風到百年

木下靜谷

乃翁六十老加壯
胸底養來不死方

壽似春山心似天
喜逢初度梅花節
身在風塵獨樂天
從今益助南都治

箕輪庄太郎

宜哉膝下子孫全
遐算更期亀鶴年

杉浦要太郎

童顔鶴髪谷神全
周甲新迎第一年

茅友

芳友

壽似春山心似天　箕輪庄太郎
喜逢初度梅花節　宜哉膝下子孫全
身在風塵獨樂天　遐算更期亀鶴年
從今益助南都治　杉浦要太郎
童顔鶴髪谷神全
周甲新迎第一年

友の文

○

朋友ハ第二の我といハいへと大かさハ路ゆく人のおゝろもてうちつけの笑顔ふうたへと飾りて下おゝ孫のおつのしからぬそおへて世の常おるそか中ヨ學ひの窓ヨ雪螢とゆつめて道と討ね藝ヨあそひおれふしと同しうして睦みかたをおのらひほとよふたのえしく樂しき交らひおのるへしされと業就りておのかおゝ西ヨ東ふ袂と分ちて後ハ日々のつとめヨ暇おけきハ參と昴とのことさハさらヨもいたに春秋の雁の便り

さへおのつのら絶ゑはてぬるか多のるとまして五月のほとゝきすいつしの死出の旅路まおもむけるもありと風のたよりまうち驚きて世のはかなさとのこたるゝそいみしきやいにし年難波おる石井鈎三郎ぬしおとしもいさくゞれひぬのくおけのひ舊き交りと尋き冷まなりゆゑこゝ為と温めはやとおもひおおきまて温知會とまうけられたりけれゐもゝ八十の友のき三十年のむのしまかへりて友千島のひとむれふうち集ゐんおとゐ難けれと故と温ねを其新しきと知るよ

をかとおりぬるゐいとも〳〵よろおえしれのきりまおんありけるこゝま野淵龍潛ぬしゐ學五車ま富みたれと貧しきかことく才八斗と儲ふきとも虚しきかことく世ま求むるところおけれゐ物と競ゐす人と爭はねゐ怨と買えをともに學舍ふありしとりゐ政良須とさへ共ませしのゐ朝夕に睦みのたらひて益と得しこと鮮のらさりさ業おりて久しく教の園まいさつきと積みその後奈良の縣まつのへてとしころいそしまるかえてことし還暦の齡とむのへをいきも矍鑠ろま公

の務ととらるまゝ詩歌にまれ書画文章にまを篤めて
これと冊子とおし物そへ贈りて老の心とおゑさめお
んよりて歌よめはしのきせよと石井ぬしよりいひお
こせられぬ今更おらねとぬしの友のきのさめまさは
のり心あつきにゝいかてかもろ手と擧けてあるへき
さるまおのれ月ころ脳の病まかゝりて心神も萎えさ
れゝいかゝたせんこはいとのさきわさなりとひとた
ひは思ひつまどさりとてぬしたちとゝまきて淺から
ぬちなみあまゝ率川のいさともいなみかねてかるの

やのしとらもとろなる言の葉おれとも若草山の若か
へるぬしの齡と八千代といのりうつはまことある人
のこゝろのうましきまゝにあやなき一言とかくなむ

明治三十五年七月廿一日　布施　萬識

○　布施　萬

杖しらぬ君はうれしきふしとのみ
竹にならひてまろゝへるらむ

老の阪のほるとなれいこゝろさへ

若草山にすめいなるらむ　　松山亮

全

老しらぬ若江の淵のかけれい

よるとしをみのゐともとゝめを　　阿部東作

ふく風にうちなびきても呉竹の

千世もへぬらん若かへりつゝ

今年より常盤の松のみとり子に

かへりて君い千世やつむらん　　佐久間剛毅

花暦めくり〳〵て緑子の

むかしまのへる君そえる矛き　　上田傳

全

君か經しむそちはいまたふもとまて

千年の阪もやすくこえなん

遯来攝提歲云新
會友如君幾人在
齡過六旬猶健全
風流自適風塵外
清神勁骨六旬年
想見春風桃李笑

仝　風外

綠髮朱顏氣益振
遥呈蕪詠賀長春

富田竹洲

童顏鶴髮氣逾堅
何羨長生不死仙

藤田守

門下爭来開壽筵
老松鬱々吐祥煙

元来清雅所人欣
休道潛龍曽不躍

野淵翁六十一壽言　西田由

交道世事情味長
老来轉覺舊朋貴

白髮朱顏尚奉公
有人如問古都事

狛忠雄

官務六旬偏恪勤
多提後進到青雲

看君意氣益加剛
矍鑠同躋眉壽堂

中山親和

追尋遺蹟見誠忠
矍鑠唯斯龍潛翁

元聞世路幾難艱
舊友三分多鬼籍
一簑泣雨古陵外
追遠知君老官海

故舊相逢最快哉
禎祥氣入詩篇動
扶助那須鳩鴿杖
興酣何者婆娑舞

搏雲生雨氣生風
不忍亢騰却遺悔
官途閱歷豈尋常
松竹滿庭交弄翠
舊時梵刹圖書府
稽古多年人仰德
無是主人粧老萊

野々村政也

仝

相會更思不易攀
先生六十尚童顏
孤杖歎花荒寺間
此中自見壽如山

仝

高堂況有壽筵開
祝賀音傳電線來
獻酬共集菊花杯
繞々天姿壽曷窮
煙波自得九淵中

石井鈞三郎

脫俗偏看身力強
芝蘭繞砌更生香
中世朝家禮樂場
壽筵今日進稱觴

壽觥滿引獻嘉古　　挂文　吾

三尺書窓共螢雪　　六十童顔笑弄髯

簪纓不飾能安分　　半生情味調梅鹽

更喜君名兼實稱　　風月貪看未破顏

野淵幽處老龍潛

胸襟瀟落古風存　　正六位　工藤　一記

志在邦家甘契濶　　藝術居然衆妙門

劬勞育得多蘭子　　學談經史有淵源

著述編成見紙孫

華甲秖今開壽域　　亀齡鶴算不須論

○

繰り返を干支や千歳の初暦　　平津　良造

友人野淵君今茲還暦の齡おりとておおし友おる　　西村　雪

人々よりそのよろこひいへといひ越されたり折

しも盃の最中おりけれい

百までは踊れ子も連れ孫も注れ

○

水木茶丘

足袋さへ別誂ならては間にあはぬといふ大兵には鬼とも挫くへき恰幅あり武家の代から浮世の荒波と渡り来し多様の經歴には佛にもしたしむへき由證あり俗界と兩脚のふみ場としなから風流と半身の生命とし圓熟の才老練の働何れの人にもおもんせられいつれの場所にも用ゐらるゝと野淵柳仙翁とおす翁こと

し華甲の壽にあたりたまへりとて自祝の詠ありける
と翁と友垣の一人に數ふる奈良の集璞會員はこれと
立句にして歌仙の興行ゐり翁の腰は海老のまからす
齒は數の子ともかたしとせす人生の相場ま狂ひとも
引起すへき健康と祝しのつは橙の幾たひも昔の色に
立ちもとりて穂長の長くさうえまさんことと祈りて
ありこれうえしうきするものは翁とはえや一昔の交
ありて古癖につきてはおゐし牛つれの

我ら干支にかへりて嬉し今朝の春　柳仙翁

うたひそめする聲も若やく　小窓

梅にほふ格子のそけはまねかれて　探花

小供の使ひまとりにけり　破扇

まちかねし今宵の月やいかに見る　波旬

靜によせるいねの穂の波　靜谷

お祭の雞子に村もにさはしく　半狂

おもひ〳〵に時めきしふり　華亭

目關垣ものいひかけていひほくれ　夢成

ならは鏡に心うつさん　窓

璞も磨けは光る世の中に　花

田植の唄の節もいろ〳〵　扇

若葉もる月と背にして打つとひ　旬

書とひらけは秋篠の故事　谷

何につけかにつけ智者とうやまはれ　狂

檀家うけよき今の住職　亭

これほどの花一時にさきそろひ　成

枝もならさぬあたゝかな風　窓

青海苔はうつてつけたる茶の料理　花扇

ゆかしくのとる新建の庵　扇旬

このゆふへこゝろにさはる事もおし　旬谷

涙のまに〳〵千鳥おき出す　谷狂

ふきしきる雪の凄さよとちこもり　狂亭

むかしとしのふ君の面影　亭成

おもむきの中々にある尺の舞　成窓

指さしあうてさゝやきにけり　窓花

たゝえ手よおさけのあまる妹か肩　花

人參のんてきゝめあらはる　扇

雲のいて月の桂のにほやかよ　旬

ことさら月立つ園の白菊　谷

出来秋の田舍とまはる役者共　狂

嵩む荷物よ舟の混雜　亭

ちのひ頃評判高き温泉場　成

貴顯紳士もるい交際　窓

めつらしき都の花の便聞く　花

雨氣もぬけて彌生空　窓

野淵子の還暦を賀して

功名りお遂てすゝしき身と成りぬ　東京　高瀬鶴堂

ひとめくりして見難すや花の山　静谷

親はいつこ碁盤の上の老菜子　天香

嬰兒よこのへりて着るや赤襦袢　一芳

若このへる心の嬉し着衣始め　花溪

師の君の赤つきんとゐ目出度けれ　富藏

○

○

うれしさゐおゐたとへん數ふれゐ　野淵龍潛

六十一とせの春よあふ身ゐ　仝

起着禮裝拜所天　懸懃伏謝四肢仝

老妻自對二孫告　祖父今春還暦年

明治三十五年十二月十六日印刷
明治三十五年十二月廿一日發行

（非賣品）

著作兼發行者　大阪市東區備後町四丁目八十五番屋敷　温知會事務所

右代表者　大阪市東區備後町四丁目八十五番屋敷　石井鈎三郎

印刷者　大阪市東區北久太郎町二丁目六十六番屋敷　谷口默次

印刷所　大阪市東區北久太郎町二丁目六十六番屋敷　株式會社　大阪活版製造所

複製不許

特40
860

085235-000-8

特40-860

五福集

温知会

M35

DBC-0177